

季刊

映画研究



◆監修・解説◆
富田美香
国立映画アーカイブ主任研究員

◆解説・解題・総目次◆
三上聡太
立命館大学客員研究員

一九四一年七月〜一九四二年二月、
戦時統制下、唯一の映画研究誌。
「武器としての日本映画」を志向した
映画研究の問題と全体像が明らかに。



全3巻



季刊 映画研究

全3巻

B5判上製/カバー装

[監修・解説] 富田美香 [解説・解題・総目次] 三上聡太 ●揃定価：本体70,000円+税 ISBN978-4-8433-6518-2 C3374

全3巻の構成

2023年10月刊行予定

- 1● 季刊 映画研究 第1冊 (1941年7月) / 第2冊 (1941年12月) 定価：本体25,000円+税 ISBN978-4-8433-6519-9
- 2● 季刊 映画研究 第3冊 (1942年4月) / 第4冊 (1942年8月) 定価：本体25,000円+税 ISBN978-4-8433-6520-5
- 3● 季刊 映画研究 第5冊 (1942年12月) / 解説・解題・総目次 定価：本体20,000円+税 ISBN978-4-8433-6521-2

本書の特色

●戦時統制下唯一の映画研究誌

日中戦争下の第一次映画雑誌統制で、100誌近くあった民間発行の映画雑誌が7誌に整理された際に、唯一の映画研究誌として誕生。発行は1941年7月から1942年12月までで、戦時下日本における映画研究の問題とその全体像を把握できる。

●理論家から実践者までの多様な執筆陣

編集兼発行人の滋野辰彦をはじめシナリオ研究十人会のメンバーの北川冬彦、飯田心美らを中心に、今村太平、長江道太郎、飯島正といった映画理論家、批評家や、伊丹万作、宮島義勇、三木茂ら映画人などの豪華執筆陣。

●シナリオ論、映画演出などを詳細に記述

シナリオ論や映画論、漫画映画論やモンタージュ論、映画演出の詳

細まで考察しており、シナリオ研究十人会の目的であった「日本映画向上のためのシナリオ革新運動」や、執筆者たちの「問題意識」が戦時下にどのように変わっていったのかが如実にわかる。

●シナリオ論、映画論、映画研究を通史的に概観

既に復刻されている『シナリオ研究』や『映画科学研究』とあわせて読むことで、日本映画の草創期から戦中期までをとおしたシナリオ論、映画論、映画研究を通史的に概観する視野を得られるとともに、映画人たちが、武器としての日本映画の向上を志向するに至った過程をも理解することができる。

●最終巻末に詳細な解説と解題・総目次を附す

第3巻の巻末に詳細な解説と解題・総目次を附した。

映画科学研究

全5巻

[監修・解説] アーロン・ジェロー トーキー、経営、検閲、配給、映画技法……。実践から理論まで、昭和初期における映画界の根本的な問題を研究。日本における映画学の原点の一つ『映画科学研究』全巻を収録。 ●揃定価：本体125,000円+税

映画芸術研究

全9巻

[監修・解説] アーロン・ジェロー 芸術性、リアリズム論、精神分析、文学や演劇の映画化、映画批評の在り方、映画の社会性・文化性、著作権……。錚々たる執筆陣が徹底的に分析、昭和初期における画期的映画論誌。 ●揃定価：本体186,000円+税

映画と詩 I/II (『シナリオ研究』全8冊収録)

コレクション・都市モダニズム詩誌 16/17
[監修] 和田博文 [編] 早川芳枝/水谷真紀 詩における映画的表現の可能性を探った、北川冬彦を中心とするシナリオ研究十人会の機関誌『シナリオ研究』(全8冊 1937・5~1940・9)を収録。 ●各巻定価：本体25,000円+税

『日本映画』『映画旬報』全18巻

[監修] 牧野 守 『日本映画』(1936.4~1945.2)は大日本映画協会発行の理論誌。『映画旬報』(1941.1~1943.11)は当時最大発行部数を誇った『キネマ旬報』の継続誌。両誌とも国策の影響がよく反映された貴重文献。 ●揃定価：本体980,000円+税



〒101-0047
東京都千代田区内神田2-7-6
TEL .03 (5296) 0491
FAX.03 (5296) 0493
http://www.yumani.co.jp/
e-mail eigy@yumani.co.jp



特にお薦めしたい方 映画史、メディア史、歴史学、思想史、社会史、政治史、近代史、文化史、風俗史などの研究者・研究機関。大学図書館。映像・メディア関係専門学校。海外の日本学関連研究施設など。

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493 年 月 日		※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。	
ご注文書	季刊 映画研究 全3巻	取扱店	
	揃定価：本体70,000円+税 ISBN978-4-8433-6518-2 C3374		セット
お名前			
ご住所			
	TEL ()		

電子書籍 同時刊行予定!!

価格等は、KinoDen/Maruzen eBook Library/EBSCO eBooks ほか各サービスにお問い合わせ下さい。

日本映画の戦時統制は、製作、配給、興行、定期刊行物の各分野で重ねた官民合同の議論をとおして「問題意識」を共有し、時局の変化に応じた段階を踏みながら浸透していった。『季刊映画研究』は、日中戦争下の第一次映画雑誌統制で、一〇〇誌近くあった民間発行の映画雑誌が七誌に整理された際に、唯一の映画研究誌として誕生した雑誌である。発行は一九四一年七月から一九四二年二月までの計五冊に終わったが、全冊所蔵している機関は極めて少なく、今回の復刻でようやく、日本における戦中までの映画研究の全体像を把握しやすくなったといえるだろう。

本誌の特徴は、第一線の理論家から実践者まで揃えた多様な執筆陣の論考にある。編集兼発行人の滋野辰彦（上田定徳）を筆頭に、共に『シナリオ研究』を発行してきたシナリオ研究十人会のメンバーである北川冬彦、飯田心美、堀場正夫、澤村勉、清水光、倉田文人、小林勝らを中心として、今村太平、長江道太郎、飯島正、清水晶、大塚恭一といった映画理論家、批評家や、伊丹万作、野淵昶、豊田四郎、宮島義勇、三木茂、深井史郎ら映画監督やスタッフが、シナリオ論や映画論、漫画映画論やモニタージュ論、映画演出の詳細まで展開している。戦時下に要請された映画研究誌の枠内で、シナリオ研究十人会の目的でもあった「日本映画向上のためのシナリオ革新運動」や、執筆者たちの「問題意識がどのように変わっていったのか」が如実にわかる史料でもある。その変化は、日中戦争から太平洋戦争の開戦、ガダルカナル島撤退に至るまでの激しい時局の変転が、毎号の内容やテーマ、掲載シナリオ、「映画法の理念」の連載といった編集方針にも大きな影響を与えていることが、季刊であるがゆえに、痛ましいほど明解に誌面にあらわれている。

本誌は、既に復刻されている雑誌『シナリオ研究』（一九三七年～一九四〇年）や『映画科学研究』（一九二八年～一九三二年）および『映画芸術研究』（一九三三年～一九三五年）とあわせて読むことで、日本映画の草創期から戦中期までをとおしたシナリオ論、映画論、映画研究を通史的に概観する視野を得られるだけでなく、映画に真摯に取り組み、理論的な思考を重ねてきたモダンストたる映画人たちが、武器としての日本映画の向上を志向するに至ったプロセスをも示す史料である。映画史、芸術史、日本史、現代史、メディア史、社会学など幅広い分野にて活用されることを願う。

（国立映画アーカイブ主任研究員）

「映画の芸術性全般に関する専門研究」と「映画学の確立」を掲げて創刊された『季刊映画研究』は、「映画雑誌新体制」と呼ばれる戦時統制下の映画研究誌である。当時の映画人たちの活動がわかる数少ない資料だが、部数が限られていたことや一年半で廃刊になったこともあり、これまでほとんど注目されずにきた。

『季刊映画研究』の担い手となったのはシナリオ研究十人会のメンバーである。飯田心美・飯島正・今村太平・大黒東洋士・北川冬彦・滋野辰彦らは、当局の「国民映画」の片棒を担ぐかたちで、シナリオ研究を映画研究へとスライドさせていった。そこにはかつての「シナリオ文学運動」を再始動する狙いもあった。

そのため本誌は研究報告に加え、シナリオ発表の場をも兼ねている。すでに自由に映画をつくることも、また自由に映画を論じることがもむずかしくなっていたが、映画の「代用」としてのシナリオにはまだ可能性が残されていた。シナリオがこのような時局にあやかっただけで、彼らが積み上げてきた「視覚性と文学」をめぐる理論とともに、あらためて取り上げられなければならない問題点である。

今回の復刻では、日米開戦を挟んだ第一冊（一九四一年七月）、第二冊（一九四一年二月）、第三冊（一九四二年四月）、第四冊（一九四二年八月）、第五冊（一九四二年二月）の全冊を揃えることができた。映画研究がますます盛んとなつていく今日、その理論と実践が戦争とどのような関係にあったのか、一度振り返っておく必要があるだろう。『季刊映画研究』がひとつの手がかりとなれば幸いである。

（立命館大学客員研究員）

日本映画史上のシナリオ



大塚恭一

一、シナリオの登場

脚本文字の「活動寫真の創作法」は、先づ我國最初の映画藝術研究書と云ふことが出来る。この本は天正六年（一六二八年）に出版されたが、自分が映画表現の地方に於て初めて天正十一年（一六三三年）に出版された。この本は天正六年（一六二八年）に出版されたが、自分が映画表現の地方に於て初めて天正十一年（一六三三年）に出版された。この本は天正六年（一六二八年）に出版されたが、自分が映画表現の地方に於て初めて天正十一年（一六三三年）に出版された。

漫画映画の特質

飯田心美



漫画映画が出現したのは、いつごろのことであらうか、といふことは映画史を研究する者にとつて大きな関心事の一つである。漫画の出現、それもそのまじまりは、漫画がそれ自身で誕生してから、それは年月を経てゐない。ほとんど映画の歴史のついでに初期に於いて出現してゐる。漫画の出現、それもそのまじまりは、漫画がそれ自身で誕生してから、それは年月を経てゐない。ほとんど映画の歴史のついでに初期に於いて出現してゐる。漫画の出現、それもそのまじまりは、漫画がそれ自身で誕生してから、それは年月を経てゐない。ほとんど映画の歴史のついでに初期に於いて出現してゐる。

映画と造型概念

長江道太郎



- 一、意味の概念
二、表現の具體
三、積表現の具體
四、造型概念
五、表現的世界

近代の繪画印象主義に於て大きな變遷をなしたことは、よく知られることであるが、映画の造型について考へる我われにとつて、これは別の興味がある。この時局として、繪画は戦時統制がかつたと同様に人間とつての在りかたをかへたからである。繪画は以前に於ては、造型とつての對象主義の物象による變遷は我われにいちばん近く、かつ直接的な影響を及ぼしてゐた。現在我われにとつて、印象主義は以前に於ては、造型とつての對象主義の物象による變遷は我われにいちばん近く、かつ直接的な影響を及ぼしてゐた。現在我われにとつて、印象主義は以前に於ては、造型とつての對象主義の物象による變遷は我われにいちばん近く、かつ直接的な影響を及ぼしてゐた。

本書の収録内容

1 ● 季刊映画研究 第1冊 映画日本社 一九四一年七月発行

2 ● 季刊映画研究 第2冊 映画日本社 一九四一年二月発行

3 ● 季刊映画研究 第3冊 映画日本社 一九四二年四月発行
シナリオをめぐる(飯島正) / 時代映画の通避性(野淵昶) / 映画と造型概念(長江道太郎) / セットの限界性(篠塚源蔵) / 古典劇文学の映画的考察(滋野辰彦) / 映画法の理念(二) (笠原秀雄) / しなりお 生くる日の限り(田島恒男) / しなりお 遙かなる修水(山元良二) / 遙かなる修水」と「生くる日の限り」(清水晶) / 編輯後記(滋野辰彦)

4 ● 季刊映画研究 第4冊 映画日本社 一九四二年八月発行

5 ● 季刊映画研究 第5冊 映画日本社 一九四二年二月発行

演出の記(豊田四郎・池田一夫記) / 映画の展開と歌舞伎の展開(荻野寧) / 映画音楽(深井史郎) / 映画主義文学の基礎(岩淵正嘉) / 映画法の理念(完)(笠原秀雄) / シナリオ出版(松崎与志人) / シナリオ塩原多助(小森静男) / 編集後記(滋野辰彦)